目録

第一　ごちそうの事
第二　きやうけんのさゝしてするそう
　くわいとの事
第三　こめてはなしをてふの事
第四　おへまうとはの事
第五　はるへましなの事
第六　けもゑこのする付いてとのあふ
　ちやこの事
第七　さうすの法あそての十の使く
　めんとの事
第八　九法母さんとさけまでやの法あそて

A 00
X 25
東京大學圖書
B225033

の事
第十七のとぶらう料の事
第十八けんさうけまつやの七のさう
めんこの事
第十二はかなさきしてんにあがむる肝要
の条々
以上
右にしるす一々品々(?)の下にあるべき
ことばはらちんの詞を略して
第一ごちりいなの事

〇 ごちりいなの序

御主ぜずきりしと御在世の御時御弟子に
教へをきさせ給ふ[illegible]の内よりもろ〳〵の教へ[illegible]
[illegible]教へをすゝめ給ふこと一切人間の後生を扶かる
道の[illegible]をもて[illegible]ろめ給ふその教りの道は
かく[illegible]の宗にこもる[illegible]の事なきいはゆる也
一には信じたてまつる事〇二にはたのもしく存ず
たてまつる事〇三には[illegible]をもつてはたらくこと
[illegible]これ[illegible]信じたてまつる事とは[illegible]
その[illegible]にあはしる事[illegible]にへるの[illegible]を
[illegible]のすくわるゝみちをしへたまふもの也
またすなはちかうよく〇たのもしくかけ

しん出家をてんさの書にあらはす之を見は
きりしたんまてもそらうへまうつしとし
の清やくそくのます之見ちの徳を知すんん
かんきにあつきつき時移もあまりと若にて成
をうしおつ事とあろつ見えあふ由のた
なるさい思之○うわやくとして法もしくをすまて出り
まだおての書にあやうりす之見ちのすをところ
えされらてらをの修行をてそそしく事成と
あるそつそれよりそ出之の書におもうる事
きりしたんの為によるなる事之故にかくきて
と名をはなれるる者へ是見ちの徳を住わそ
おきこの縁とかきとくれなる者之国に肝要なる

あにまのひとつてでうすにちかひてあまるひと
てうをかうみとなるへ経は往生のためなるな
ぶ事ときたゆしたんにそしてんゆるに出さん
てよおのつゝさらをさちいささ師によそるへきまつ
者之名付て出こちるのるきまりしたんてい
見ぬきまりしたんの義へといふ全之上下てん
きんみたいをとくさし様を知ちんりゆるよこ
とくいそくのみてよちらく彼は名の存こと
さいしる者之○見よらてこてつまそとをるやうに
わきまてんりゆるに師才みのちんさいしとあて
てはなるる者之をれそさ出こちまいるは一切の
きりしたんのゆるにあんしんけつちやうの

一たびわれて信しと是をきゝわさまてん事

当る要之独よとしてはまらいのやうとのれ志

のいかなまよとをつくて一

師　それしさんの法ありさてい志ろの法義ゝゐ

まいらせしたんにてける者んとゝいかれと

聴聞を頼ミ肝要之とありさてのすと

申も覚らん

弟　出りてさとし聴聞して在生のいりをと

叢アさりしさんにてける者之

師　よろせられたるすいらん

弟　よろせしすありとゝ之

かされよ

師　そもそも孫善くいひ淘にはなう早すくゝ法をは

のとしを志をなるに才一肝要のさいもくと

弟　一さなきむらて生志諸光とありせすて法個者てゝと

いはゞ一体のうへにて立ますところは我慢
現世は世界にそうくいますところ○此清
一体をおかさんとくはかりとしては衆生の
清くをけにおつかみすさうふなし○此むし
衆生の信いきらしたんの清おきてのおもし
よきつまなるところ　それによてきらしとんに
たくさんて衆生を救すまへるそことなる
なしね
師　人々のすくを作るとなるなせつれけるそ
弟　人々るは名かの本におてすえたるなりすそを
あに御となる○此あに御は名あるに翁となる人
たゞは名あるは去てつとすると云とも此あに御

いそなるすなしくて善悪に従て衆生のく
らくにおはなる者也
師　よくなおなせつれしを出りてきますとの清代
のことは星の那ことたてきらしさんの気にすきて
叶ひさなりすりおうなる也
弟　それをうけ清きてこそは教化におはなるを
さゝことそん十御なき
師　是我身にすなる也○まつきらしたんにまか
御まへはたえる人の志わさところ一生
なしや
弟　てうそのかくさせはきらしたんにすくるなら
師　てうそのかくさとりてとは作すきそや

弟 こ候ぞこ海々くるあぜす様りくハ義へたゞ
まんかし

師 でうすのかゝさとゆうハ我身父母諸他の
ものゝ力をもかつすてゝをの御清かん
さあてと清悪然とて人ゆるせすきゆしと
の清物力とゆうさゆしさんハ始事之

弟 へときまりしさんまうつ向て時は何しろ
信とうけら向つそ

師 御原へさんの子でうすの清やうし未
の清ゆ清のうけ者あると御作者之こち被ハ
御でうちすもときさへ人きさ信よあけ
しゆゆんとあうしめすにらそ之

弟 すあしさんハあつさふへいらん

師 御でうちすはしとされかつさ内にてそゆやうし
とあゝたまひすゑの清ゆ清のをそうし
御作者之

弟 きゆしさんとハ何すそや

師 清まぜすきゆしとの清義へと御中よいい
てとにくるのまたゝとここてをゝんてし
あゝきん之

弟 何の成よう清あぶしせすきゆしとの清
義へといいそをまうけことてをゝんてあ
ひすへとゆうをもけうそ

師 信のきゆしたん清よ御せをきゆしと

のぞき清書と云中はいそうにうけ
をしたるものゝうちをゑらびてと云こと
ところよりとりあげておくといふての
かくこゝろあるべき

弟 さうしと云は何をかくことなるか
ぞや

師 田さうしとをかくことでござります

弟 さうしと云は何する清書あるはして御
ますそ

師 家のてほん其家の人にて清書ます

弟 家のてほんにて清書ますとは何事ぞ
や

師 万事の手本にて其の家の清書と
申こそてほんにて候ます

弟 其家の人にて書ますとはいかなる

師 さきいふにさんさ御手本其の
家の清書にて申こそて書ます それは
そのてほんにて御手本清書 其家の人にを
て清書を相手にのこらず人にて御手本
清書も能よみて清書文をねたまねべく

弟 何ゆゑそのやうなる事を云ふかき人か

師 さうしてと云は其田それよりもれ出
と云句文をのこらず書きせずして田から
為た中は三指の人のききそうことをとられ

御ひいしへ清まさせすきりしとへまそ御座
御ずれ帝王の中の帝王さ世ぶさ
まての中のさせぶさしてかろ御ざさの
中のかろ御ざてまて御しますれはそく
さんのどもまよのかろをいとゐつろさんと
のがらさとそうらうて拍のつかまそへおとこ
唱へ（奉之

〇弟二　きりしたんの志御しと
あろきそくろ玉のす

師　いま清まのさもしたんと我等のいうまをあろ清
ぜせるきりしくの吉さ清くろすに對なそ
それの御分別をもつとすろ之を敢い
我等を拝ろをのかしゆん為のかの
くろすにかくるとしくおかしめしまち者之
をまそて我等よふあろをの志るしと
清孫にとなゆるす所義之〇くろすの
とんいう事に唱る之〇一ぺんいたし〇二にん
〇三まん巳孫之

弟　きりしたんの志御しとは何すそや
師　右よ云しことくきさて清くろす之
弟　其故いかん
師　我等の清ませすきりしとくろすの上にて

て我をとけるへしあるへきそこ
才　けしろをは物するそや
師　志ゆみの方とすなり
才　すぶしろ人の志ゆしに如そ
師　それ人そてよやつこの方と如ける者也
志ゆしに如ろゝ
才　さてハ我等ハいつれも人と如けるかみか
師　中ころうもまうやはこ
才　物する者のや法にはあるへしとあるへ
師　志指と我等か拝のや法にて清浄のゆこと
ある拝を拝する者ハてんまのやつこ也と
貢すし見ゆる敵はいんとあるまて人
かゝるかの拝とおなしく志指ところ者と進退
するの敵のやつこと如ける者也ゆゑよくろを
よかくまするををそもつてここやすてらるそ
とされるみは清さのさかくめんとあ
あしとをうけ其もつて者にゆるせそをきらし
とちへかんかくさとをそちへの法の拝を
のかくしてうれしのつよそてちくるとのゆ功力
とつて清をせをそなくしとてんまのやつ
ここなるとしる所をうけかくてありつとゝ
さまて人のやつことそをしる者をうけ
かくてけしろ志ゆしよあすすいまよ
深き恩をうへやつるにかへし明日あ人あさ

けふくあしるをしろハけふけハかへさんまとちる忍
と済をあるゑてえ我か名をせをやれとして
右楊の中をうるを掛へをかきさとみてこをかへ
しまやす志ゆしにおしすふ清忍の法を
まいくそそくのまかうんや

才　さきをしたんいくろをといくさ内ましとみ
ゆるそ

師　二楊よ唱ふる〇一まん中へゆしみふるとて云〇二

才　中へみしたりとは何すそ
みん中つんせぶしと云

師　右の太ゆゆみてくろとのもんをいさらと
れしもも移よさるゆる

才　さきあもとんと唱ふ時ん何しろ半しとよそ

師　中へふしいかえゆんてくろしをてつよさ
志ろをおつをちをとをいやおつをてしを
おつをてろしこのことこのもん我事ろてしを
さんたくろとの清志内しとそ我おりてさ
とのしたまへしと云ゐ之中つふ志いみんさん
てくろしとの一る之唱へていさらよくろ
をもしそつ之中てらよみしすおつをちて
とのつるよいはくろをと唱ふ之中へつおふ
とてふとおまてろの一るよいむ移よくろ
をとこみゆる

才　いたつとはとし移をさ之示よくすをと唱

一 半ハ修する志さの望み
師 いそいに帰りすてしもらをまつり給へとのけ
一 白けん為に帰る帰りすハ音ゆへしごと
はらをのかし白けん為之文し給よ帰る
すハ白きハ情る無き不便とのかし
白けん為之てん由んくるをうしとおそき
まうす事うしさ敵ハをひを情されて
たしけんむ志ゆんとかきよりら由る
在らし給きた情まセとさらしと
くるものよてて死のうかゝをそこか
らめをえなひんと志らしよらしたま
へかきにちる情りんとする者ろさ給よ

あらためをすけるやうよしまうすらて
大きよくるもをおそれ事之のたゞくとりて
竟と云て情るゝれさるほとけ情おろ
そそうかる者よのきくいほくらこころくゝ堂
せをさらしとくるものよをそして天福
をかうやし白ひてきをはい料をこそ天福
のそうよかる者よ のきめくとあすあ堂
修きのとぶる料 あるとをおうを時ハ
天福のそてよたちるを料をてんとする
時天福のそてをるを志をそく之 けあのす
皆くるをまて死のり情きせとさらし
一 との情功力をこそ出来なり天福そ

しらく気つらまふそ右さよ今ろをもねそ
四つ之さ人合せらしかとの道のくらゐあり
なまさらつえは見てあそまそのふかごとく
くさとのへんけもかしかよ鞠之ゆてよよ
身そ宜ふいてもといいてをとねとくるを
とりらひをかへつてありかしろまでありと
いつでて鞠時わたくの右稿しかきよりのて
いまそさるをたそれはくとかさましり為よ
かね稿てらを身のよるくるをのもんところ
れまで右稿はくとかはゆ合をとれこそとつ
いよかありさありしとさ鞠をいそをと對せさ
お鞠さへくるをくと鳴て右稿とふかしける

まけ鞠きりもしたんの鳴へあまそいかりま
つきや　　よ
未へあ志いそりと云鳴へ云聲あまは由つへんせる
と云鳴へや　と義へたまへ
師右のまを以ていたいろをも稿まて左のかさ
ろを右のかさまそくるをのもんと鳴ゆへ
はよて鳴りりん由いんありしみ稿をあちまを
を気らいいまい気つをいまつはんちあ
めん。ばんにてしそておてもいいまよ
気をいまつはんとの陰名を気てとや
鳴由いんありしみ稿をおちまをして鳴時ん
まといをいよさしま由気の花いつまれをせ時をさ

し称とさし玉ふも此ひつきやうして衆生に施の御
たからと云時は名の中くまことをやるらん）

弟　さてもんぜんの唱は何の為そ

師　我等を信ぜしめん為めてしととおてき
ひつまをひつまゆるしと云のつみとさしを
信仰のてうとを珍らしく有為）

弟　さて御おの志さいまる

師　信しまとをそ我等をとくひすいれすとを珍ら
いかに有之）

弟　さ志ろしとそいつたる時は唱へ候や

師　さそりのまゝ御ふ時とさんきよおふ時
仲みやも称さまおいさ仏我りやとなをそ

我は常に有ていやへいふ時云くいおのこお
の時唱之）

弟　さ志向しと存るま唱すゐは何すそ

師　てしと我等とてきのまゝをのかはしら御ん
為なきを仏時し仏さる所そと唱之）

弟　所作と御時唱すは仏さる志さゐそや

師　さ所作と我等ありてきもさ御ゆけらふ御
しさ為ろ人を所作いてしをのくらし
あやしと始生有之）

弟　我ありてさしいはゆるるきそ

師　世事天狗多あ々有之）

弟　さらのすとおうるはへ人やのてをとなそ

云ぞや
師 てまへに あふ角よ あさき見るに撥をおろさ
こちらすか なるに糸して 弦をとゞめ入ゐる
よいきかゝらうす かならふまらぞ
米 何ぞ糸のてきらをあてゝ てんたゝんと
てしとやめた角かわまんいかん
師 それこそてきたいてしとの合力をもつて
あるんといふ文をまんのゆるりん
ぎやうとらんた角ハん為ぞ
米 三の糸ハ何と糸よ てんなさんをあてむ
あるぞ
師 左よおく糸んとたゞし撥よおさへた
よあいもちらんへ手をまきんへよ ともとを
のぞ
米 そめく糸んをうつ何と糸ゐ画せく つきそ
師 さらいあつきぞ 中あと三の糸の一にあく
糸んおこる時せん糸んよいきかゆるす
二のいむ糸よゐるをのちんを唱す○三のろん
てうちすしの手ほどかしらうそく
すうぞ
米 画のたるをそらちあまを何と画せく
つきそ
師 一のいとちあまとよくかゆす○二ゆへかうし
よとゞめよす○三ゆへらをいけん

才　世界とてさしと云ハ世界ハ我か為ニ作るゝ
ことを之）

師　世界ニするゝ無作無する人を名付て
申そ

才　世界と云そ

才　世界ハ作して指にてんたけんをさしむるそ

師　右よりせし無作無すと云ハ無人の
無をさしたん事を第いうき事を以
者之）

才　此の様を悟せくなハ如何ん

師　又なハての時たさてて迷るせとなる
しと申として書くものゆさけり

と書の生と申す）

才　にくさんとてさしと云ハ作すそ

師　うけつく細の料よりそ無二生死の比
名分を言之）うよみかつあしきる料よ
そあしきくせの志しまんしる所
とさしそりを名付之）

才　此名分ハ作とてんたさんをさしむるそ

師　生まれあふ無二生死と無二くせとなそ料
にかくて細くる者之）

才　うち無二生死とあく（ハ作すそ

師　無仲よたこふうるとそるのそ之）是一日白と
くへ細して無くと見ゆ細れ指にとる者之と

ところ〳〵の深きのそらしたのもしきこと
わいすりとよろしとらこひとらあそ
とゝそまてといりまみとのまし
才 さりしたんの囀りすんいすそ
師 きゝさせそくの法わく
才 さ敷いらん
師 せすしとん法枝まてとや色ゝそれまくそ秋
わらかんを太すの声せろ法さいとはやく
まへさ為まゝせすしの声を法ろ囀へ年
ふゝりふりゆへませすしのにてやすを法ろ
を囀へやもる時深くらやまひ年らく

の才三出てあてゝふかします
ぞふのす
師 らゝ海のさんさそけまてやらんま数へまふ
あくしよと数ゆて法さよ文任し
まらんを至とへてもへを何侯て
わらんすつさゝぞ日をあてゝふかしそてる
才 あへまうとあ さゆつれしあけまと十ケ
至の海さめんとをとさんさそけまて
やのまんさめんとをよこりゝとふ皆
ゆかかせをくして一つんま任し 法ぞとの
まらへさゝ
才 居感のさへ自りをわを海ゆうかその法

よろしきうへにもしたんにはすいと思て解客も
あるぞへ
師 三絃のうゑにおいてもすへてかとく糸を
あまたくうく絃しあまくらき高低をな
とりと知るへし）
才 てしとよゆへよく絃をするとろへ作とし
るへきや
師 なるてふのことてろしまて知ゆへし
才 まして絃しするへき 絃をとる作してし
ふへきや
師 けさとりとよそのあけちいころをさはこそ
なり

才 絃をよろしくつとむる絃をとる作して
志るへきを。
師 絃をよくたゝむるたとえば熊たりつ事
いてしとのたるきてのまんさくかんとこ
さんとおけまてやのまんさかんとしをま
くおまそくつさるよりそのところ料を
と知るへし
才 さてしく絃しよく絃をきまを入る物を
よくかさむるよりさ三絃のしとまを和
よるの肝要するものまことや
師 中〳〵肝要するものあまえなそれるる
らるのさう稽すてでしとゐるたち

さよらんはかなの為にしくしく修行をなす
あまねくいそきよく形をなすなる為なれは心をも
つくんさ身ねとらくおさむる為にはかなさ
あそ是之されとらく形をなする為なれと
あてなるをしをてらす御まれなと教ゆへて
弟 天に清座す我等か御おや 御名をとふと
まれたまへ 御代来りたまへ 天にをひて
御たんなおその御か行ことく 地にをひ
てもあらせたまへ 我等か日々の御やしなゐ
をこん日あたへたまへ 我等か御をおかす
人にゆるし申ことく我等かとかをゆるしたまへ
ゆるしたまへ 我等をてんたさんによはなしたまふ

ことなかれ我等をけうあくよりのかした
まへ あめん
弟 此義へまふして何おしをてうすの御あるし
ぜんちよ人の御口よりまふされしぞや
師 御あるしけみくと我等か清をせんとさらし
このちさまおへ まふあつよし
弟 何の為ぞや
師 をらしよをもへきやうを教へたまはん
為也
弟 をらしよとは何事ぞ
師 をらしよとは我等か称んとする清をしめし
てうすより下よろつのそみをとらなへまふす事

なりし也

才 てゝすいは法くるは法座ゐすぞや

師 左様は法くるは法座ゐす也

才 それなてふたりとてあるといふ時は法きのこと

ゐるなて我等が私んなるなき法なりしまする

ぞや

師 才一句目のまゝ法座ゐを我等が法をやと

云ことしなり之

才 法をといふ法そして法をやといふすん何

よすぞや

師 法をやとよひまするを以て我等を大切に

かりなさすよを思ひ出しだのもしきも

とぞてこひまする為之

才 我が法をやといふさるとして何とて我等が

法をやといふひまするそ

師 法人兄才るてあるき法をやのまゝあるとて思ひ

とあるてたのひは大切に思ひおなさん

為之

才 てゝといふことし法座ゐとといふ何ですぞや

師 我等が法をやと我等がたのしいひとしとをよ

大まおあとと思ひ出とを以て此世界の

ますと思ひとなつとる為之

才 右んなてゝをいは法くるは法座ゐすと

義へ法ひてしなし之大事は法座ゐすといふ何事

さや
師 てらといはくうて清座せすといへはと
えらいもしするに古人よりよそんたいとちき
まりせ給いんなるおとをきとめまするよ
よそうて
才 我家ノ務ハひをも仰ゝるこころをもつててらとへ
ゆゑそ
師 あいはくのころのことをもつてゝ
才 あいのこころこころをもつては仰す裁なるそ
師 七ケ条の儀之
才 それ仰ゝそ
師 才一清名をきまれる両へしと云儀之 此所た

てらとの清名とくらり予何業家まひろせるも
給ひ一さいへるの清まてらとをとを清ま
清をせとそるのしとを見知るまらや
まひきひなる様まとと云所なる
才 才二ケ条国よ云仰まをいひなるそ
師 清国まて給へしと云すゝ 此所ハ無すると
さいるとをのれたゝてらとと清方の
清まなるせとそるのしと現世まをもてい
かゝさは生まをひてらくらしてゐるを以て
我おもと進退しし両へしと云儀之
才 才三のこゝひなるすとは仰そや
師 それをもつて清はんなおその清かなさ

ごとく地よをいてもあらせ給へとの儀也
はらいそよをいて給の御あんじよたちもでうすよ
したがひ奉るごとく地よをいてもつき人あてらるゝよはらひ
きゝゆおんたゞおてのちよ仕へ奉るまじき
と云儀也

才 才四のヶ条めに仰事といふはなんぞや

師 日々の御やしなひをも日々にあたへ給へとのすゝめ仕よいおゐまの為よ日々の御やしなひとおもへ給へとこひ奉る
色はきゝて王たゞしかでもらあのはかり
めんとこかうさ吾をひつるあぶこんたす

をとのすゝめ又名乗のそくさつと名をはく
つさ為よゆぶうてのすゝをおらへ奉るへと
こひ奉る儀也

才 才五のヶ条よ仰すといふ事なるや

師 我等をおかす人よゆるしこどく我等
おひ奉るすをゆるし給へと仕への我よ
対して人をみらかてちまらく云ふ人
たいゆるをゆるをごとく我等がてとを
よ対し奉りてなるすころおやまるを
ゆるし給へと我等奉る儀也

才 そまるてる王かろしをよ対して我等の
いこんをもてもんそるあり捧とゆ時

師 さ候ハヽ半生まさりしとも候へ
中くらゐなるハ情あらんさとをきわめし上にて
宣ふいろいろしをよく對してのいこん
とすてもんを主て情をかすするる情をもゐ
とも人の拝をゆるしまするとすと
才 ゆるハ人をかけ候ちゑらくとゆうさ
さ候者ハ出来ぬ情こしころと申時ゐる
まかけら候ちゑらくとゆうさんこく
るまつ拝をとゆうしまするそと
申出たるにそ出来ませぬと申すけ
ましや
師 其所よりあるをるる申したしとのちゑらく

とゆるさるかりてのけんこんするへあるところ
もて出来るよとやすまるゆゑをゆへ
出来ましよそへ人に對してのいゑを
を情るのにからるとするからさとこ
いますかそゑとまさんたちけまてや
の情をて申せる善人主人をかけさる
ちゑらくとゆうしまうこくまくる拝
とゆうしたまへと申たまひて右のあり
しよと申しるすをるるのあさとる
ふるんあると
才 才六ケ条を仰すをこ出来るぞ
師 それさうんよ何してるかたまいさまてと

云す也　此ぜんちよ此世界よりてんてらさんたに
ぜめ何ととぞ是にまけねやしにそうと
のがさと教へすする也
才　其七ケ条には何事どもなるぞ
師　けりおくとのりを始として云す也　此ぜんちよは
まのぽったとする拝と名付のうらそりは
とのりを始として云也
才　さめて御かへしをてらみまさるとなるおらしよ
あるぞや
師　是にまさるとなるおらしよにはおほきなし是
さいちゆうのおらしよ也
才　其儀はいかん

師　てんのこびをさかその肝要なる条々を
を此おらしよにはこの御ためにて唱へせずそうべし
と唱ずるすまじき義へすなわちましよるなき
とあるべし
〇才問　あへすなるあのす
才　てんのこみに對しまうそのもおらしよとを
つきや
師　云儀にあらを我ちか唱えとてあるなり
唱ぜず語のへおとせ給て其人の為に
あらうしとなるまじ唱母〇〇せんさん
たまるとあるはおらしよをと申し

弟 いろせんさんてすまおかしとなりさしくまし
そうろかへしよおつうく

師 あつまあと云かく志よ之たくいまる教由へ
かるさるちくあまりするあよ法出つをか
なり法をいは法花と申すは法蔵よりしよ
じんのみよとひて発ちてよそてとうう
せうか之法たいのいの法実よて法蔵菩薩
せそうい発ちいとまて法蔵菩薩すてうとの
法母さんたかるをかんとを我かろさいこよと我等
無人の為よ形をし無人かめん

弟 さかろ志よれ誰の他かまふそや

師 さんうひてを念ふかん志よそくるひるせん

こ まるをかよ法法けを為しかふ時の法こととと
さんとひさつるいろせんするをかよごん志かし
せてきかことことえよ人さんたらけきしやよ
のことことをそへまるを此やたそまる阿志は

弟 法母いろせんは他人よて法蔵菩薩すそや

師 てうとの法母の為よ念ふい出させ給ひ志よ
とひて法の阿弥陀志よのとてそをへられ法ひ
法告みちくまふうさうよて法蔵ま
すまよりそ法をせんときをしての法まん
まさして法のへかとかをもくまて法るい
せうよけのかへ そきまそて我まかりよろこ
とむさとかかせけわち阿弥陀よをわたく

才　きりしたんはくちんかうしまする人
何よりて清母さんさんまりやに對し奉て
百五十反か六十三反かのおらしよを申
上まするぞ
師　六十三反のおらしよは清母びるぜんの清年
のねんに對し奉て申上る也百五十反
のおらしよは十五のみすてりよとて十五ケ条
は清から三ひとつ五ケ条は清かなしひ五ケ条は
くらしてりやの清こと[illegible]に對して申上る也
此十五ケ条のさいもんてんの事ひつちうる
才　一しよのあまり
あるひとりよそなはるをすつには[illegible]の[illegible]

こと説れて清存出来まする
師　夫に清在まする清母びるぜん御ごとあふ
出ふされまする清おんはまれてならやすめあり
へき者也
才　さいはいせんさんとまうあの清おんはるさる
おわきこそくもの御をあまて清存ます
すや
師　ともよあつきたうゑに清存出来まする清いと
をのあり
才　[illegible]ちさんさる夜時御は清あかりまさの
清母御は清かつからくのあされて御から清
む者の清かりわたまかせてもとこ[illegible]てはまりひ

師 まうしん候すそや
おのおのゝ志さいを申したく御母の御らてあそし
そしての御まへにてらくけひ給へ御あつま
との御母にて御座ますよら御志ゆゑの御
思ひとらんまつらそらくのごとくに唱へ
奉る之

弟 あべまりやのおらしよをば給はしらひてや
よまうそ

師 きさたうさおびるぜんさんたまりやに志か仕まつ
弟 何よすとこひ奉るぞとし秘あり粋の御教
しとこひ奉るう
師 を候よあるぞ

弟 かくさうくらしてあるぞや
師 を候よしあるを
弟 おくそびおの候とを給よこゝひ奉るぞ
師 御まてしをよこひ奉る之
弟 御母よん候すとこひ奉るぞ
師 びおのすを頼めんが為よ御ありて御座ま
すよ御まゐせときわりしとの御まへまゐてゐ
とてあいせを粋き奉る之

○第五さるべれじいなの事

弟 御母びるぜんさんたまりや何の御どくつきあせ

師 を称するあよりあまねく
中〳〵さんたんしけもしやうかちからひよるきを
あらしよいあらを申すとてかくてまゐらするまじ
しりたとゆあらたすよ見すべきことをのく
よ教四ツ了○ゆれらの信心こゝろひよりて
まいします信力よ信心ひとなく等ろ一念
りんに教わら乞すへらんさまて信仰ますま信
力人信出にとなしするんをたてる意この事
たら信力へさけひとなし奉すの念きこの様よ
おそらめるを念して信力よ称るひとおけする
見よらそて教わら信と見なしてゆれらの信
船を教あよらむかから世法つゝ人はあらしの様に

信だいまいのきき実よそて信仰まします世をそく
教示よ凡世法へ次をゆふしみん次きを信あい
まんをくきてあまく信仰ませびぶせんまを
ゆうあきさてうすの信心をしとのゆく
そくをうけする身とたする為よ称ミ候へ
あらん
才 はさるへのあしよとて後人への為へまよ
そく
師 ゆんさをうけまてやるを為へまつく
才 はおしきよとや此は後人へよりそる
師 信心いあらせんさんさするをゆよやし
才 信心よつまわまあのへゆてまと候ふ一為

師　半まくや
いはきのへおてみし信心まへとくにすなおに
中ゆと志りこのおんしよて秘ゟ小乃に付
弟　以之へゆとよ信心とおへこの肝要之
志んかし信ゟへゆとよ對し仕ゟあし
ふおとんへきや
師　さんさおけましやらなあへすゑあしよ
おゑへゆそぶのしとてろおへするやと
とやし
弟　いおいてあそぶのしとてろのおゝ志よとて
てしすへやしう志るとい志かし候やとや
師　そうしさゑなゝへおとよ對してあてろ
ぶしとてろのおゝ志よとやしすいらと御こゝ色に
てへおとの御切なよそてしとやおつまて
とたれ候へと我をまゝ物ら残れ者おゝしよ
と我ありゑてしとへさけ給へとへおとは
やよふむすもまさ
弟　さまてへゆとよ對して信心とおし御
かしてとゝく我をまゝすいは後の時あよ
給ふへきや
師　それは御さんのすすゐへさまもあて
さんさおけましやらへゆとのいて
いをだこゑいすゝ付之
弟　さんさおけましやらまとあとも白とものひ

師 さらずんば仏の御名を
おもくのたまふあるといへども仏にて天の
使あまてらすとよりて此世界にありし
かへ法をとくを見奉りてそのことを思ひ
うやまひまゐらする為之二人さんだるけまいてやよ
是即菩事にをのていひすへいとへのゆゝや
まひと見んで天よりのてこくらふまをのゝちる
ゆすともおかお捨とる為之○之にへいとのゆさ
けし法をもとくまて称おし人同さ人まての
広せゝめかしせことをまゐらひすゝ人を為之○
大法為生の時法女とてそまかすゆんとも
けまてやのを対て死ぬすをかへ見経て

すがうくをつくしまづ法華経をよみて死し
まづかくとそあまね経じん為之
○才六けもこゝろひねひいて
そのあぢはひこの事
才 おぼえてやはらくよくとを聞まゐらす経を為へ経へて
もらえたしやかにもふんてまゐる居を志め
経へ
師 けもとこそれまことかるひそそのあぢはひ
こゝをあふすをとをを義也了けもてを
田土に信しまゐらするけひ天死を仏まを

てうとくあって此世○人こそ法いとてまたみ数あり
法をさせとうらしとと○ころはさいつるまん
との法をこくとゆそてやときまめいていふ
せんすると申生まれすふ○うんちよいつとう
をよとひてゆちやくとけこうへくるとみけ
らま死たゆひてゆくへんよむさうらもすつ○
天地のそこへくるをたまひ三百国よちをかつて
まつ○大よとるをたまひ万すよけあつてうすそ
りてもの法右よそゑうるをすつ○そまちるとは生
其の人をたくし由りん為よりまくてうをまよ
て○をいつるり人とかしとうてやうよて法衣由
とさんたるけまくとまつよ信しけるの○法ん

まず法ほうしをまするすと○神のゆゆうし
とう○よくたまへうまかつうつきすと○とうをみと
為とまつよ信しけるあめん
才 たしそのけまてとこそ仰すそ
師 いやそともの肝心の事しと信しけるとあさ
昇すらん（と）
才 けまことに法人の修めてそや
師 法をせとときるしてのあかしをところまとい
てろさんちの法をちいさとゆて一所まあつ
まるとゆいて法をせとうるしとの法はる
ちさよゆたまもうつも拝をつふ拝まうる
才 ゆの為ま仰拝すつそ

師 いはそれよりけはる人〻きまりて我等によく
御いんあるへし
弟 いはそれとも何すそ
師 ても我等に法けきをさまつかのすそと
さんたゑけれしやの事をもつての事とく
けんこに信しまつりやうにてもをさゝらし
たんのあをまよちんくくと内にあつかちを
ゑらる法恩のひろまる
弟 てはそれを法けまつるとも何すそ
師 御んさゑけれしやを信しまつてある
いうかいてのことをも中にもけれとよ
これのいのてそのあをふちいこと成それ

弟 けれどもこれのいはそれとのあるちいこれ何そ
条そ
師 是を法と猶すおりそとろ十二人あるこ
とくに猶と十二ケ条之是をつかさよりけ
て十百のあかちいことすしとりそゆる
とあきちいを玉ちひよたあその法がおる
之ちいせをきらしとの人よそ法存ます
法のよあらるてく甫てとはるともてこ
けれとこと我ゆるのよ十二ケ条に法りよそ
あるずすてオ一つ石記と法但みさかもてる
万すけあってしとてはてもと信し奉る
数生を法しとしたかい我おり法をせとさ申

信し・たてまつるまうす第三因をいふはさんとの
ほさこくといふぞやこれをばいちせんまうす
あを生をまうすまうす第四人志よりとうかは
そりてうさやくとうけこへ法ひろをとよけ
ら生死し法のて法くらんよあきからまうす
こと 第大悲のそこよりまで法ひ之百日より
をかへりまうす第六あよと生法ひ万まうす
あまてしもとをあてまの法右よそなくらをもた
まうす 第七生死の人をだくしき自法
ひ人為よそろをかりまうすつきます第八とひ
ろさんとこらこうりさたさんとあけ
まうやと信しまつるます第九さんとす

きつまうしはまうす第十拝の法放
信しまうるす第十一よくたひのよきかう
つきまうす第十二とをとりまうさ一翁と信しまう
まうす元之

第
さい志よのあらちいこ万まうすけひ法ひ大悲を
仏まうてしもとをあてきと信しまうるとい
御
仏まるるそ
書のてしをいふ法師の御法座まさまうす元
[illegible]てあそれひいまよすひたろさんとして
法座まうすとのくさるしたんこそ
まん信しまうてけいさふす之の為[illegible]
まうる此法座大すといへるだく法師の

てらどうぢやうのちからは、この国日本一のへう
さしあまりて法花まするでうきをすゝめてもの
法すとさうしもうさう

才 てしをこのへふきさしあまりて法花まし〳〵あが
法師のまことにいへることもくるしからずあるかし
かうし

師 それちやうほんだなくてのみをもてまよふとてそ我まう
いふてそのさうしくの国にそていごくいさまに
まことのだんそことなりぬを(之)をなんてそれを
むねやうくふしさうに法花きし我あるち
おいろうのかをりをあらすあまいあるあさ
とよさをたゝひくあまるとよさすしとて云

てしをうそ法花まする法をせをきらをしてあ
さうのまかしもうとも奉は候しまうさとしてけ
くさう候之

才 法候とくらくあるするたあるたくさんぞさや
師 だらへ主我あるあるにいたく一佛にてあるをまいる
玉ぬかしをあるきんてんしめんとおんなくて
三つのかてんしやうまことてくてしと法一佛は
て法花まし〳〵かくをあてもいいをよきひ
をつさんとこのへ法さしあまりて法花まする

才 わいのこうふこととろ三仏の法候あさうまてよ
て法花すまするんおなまして

師 それともの候はせしと可すけひあるあまよ

て三従此人はじめのきざみに　かなふを仏を出し
たまいし法身のくらいおもはれて我等が為に
そしておさめまつりしとや申候
才　法をてしとおきて　かなふを下すとおりせまさ
まま人とおおせてたまわる法仏の御れいを
法身ののちの法さまをを出しすまふと
凡ゆる之紀の事さんをおさ　かなふを仏を
まふとおいりん
師　此御さんとさうく為に一の名自肝要之そ
出ていはいてしとの法々の内にて法仏の
ゆいつとおりしとおこどもされくの志をさう
こりをまする之を志ゆきしと印儀に由りそれ

とぞ云之此いそれ仏のゆふんおいきとてすを
ご同仰之紀られてうをいまんざうぞ仏を
まする時法身の法をおよる様まうてそれは
無しておをまする之そまえもて法仏の御れ
法をゆせるを出したまふてとてあれおう菩
とくおさまかなふを仏をまする之を取い仏を
たまいんあるを為のし御此とた錦しるく
してたるあれとたかりめをめを以て仏を
まする之たとへてもいくい心をたてんとを
御時まうとさうし法を我々おるの内に
ねそれる無して其のめぐるを仏の之されて
かれたりのゆのおるの内のさうしたまへ

おすゑてとくなうを清くするの国にお
まふ清徳のゆのいで國に慈して徳ありまする
と云つて清徳のゆゑといそおこりをぞ
万すけむまふ清きんつきとみてあるき不
うる徳ありまする
それをみるとわうを徳ざいますといふへきれ
あるとくつて清方のそんたいうを徳ます
とうそうんえだれ清くするの国よ おまつす
し清うる徳を存へる
師右のことがとをするまふをりていての
細んいおきつうおいふくてそ敬い
右のたるへまかせしことくいなら慈の

さし清よ慈して忠を徳つとこゝろへまして御よ
出来ぬ忠ござらぬの仕よふおゝきをみへて
いくしさいとくみくしてあまつて此ようけと
りて忠を徳うすゝみでそのていまゝよ
らい忠孝を不らを徳しうして云つ
そここくてしとい徳の物をいろ方のさう
清よ慈して徳ありてにさへとと云清徳の物
そんたいうんわをみてしとい由いんいふを
こし甘ゑて万すけまつそんたいりよて清
存すせを万物を徳ぞし由いん為よ御徳を孫
存るをみとしてをし其徳ありまする敬よあるき
不うる徳ありますで云人清徳の物とかきるを

はつねに於て〻そのくんたいつゝには志ゆうしん
ていのこゝろをかるといふともおもはるゝまゝ
弟　右にいふがてこそ御体の体のこゝろをかる
そうけ御心ある上は御体の御ゆへとたつ
いはに一体より外御体にてましますとありつたり
まん
師　御体の御内は法をも御掟をさいてもの
御体のまする時それ〲に悪しくらめつゝ
の法らくとらん結へくは之を御掟は御体の御内は
おそろしかるくのせいとくく之観をいつそ
しまうしおわりを仏と気に志ゆんをまきを
さふおかる物に悪ろをとかくの体をたつるこそ

ゐてでうすと云奉るは一ツにてましますと正体にかゝる
かくしのさ御は御体の御内は御てでうすのすゑを以て御ちから
ましとうかりまとして御内の君とされよそてま
てでうすは一ツにてましてとうかりまかり時は
正体とまつたくかゝるとたこて本にて
しまつらしと御みと云ことうかりまかゝる
よろしまいうしふおつとさいはいのうくとくいしく
あらましつきと於すいまさいてはかつてさきて
まのせうらすとみゐてて
弟　才二のはぶちいこゝに法らとてをなん我おかに法
きせこそきりでーしと徳しまうとは血れ
いらんい

師　法をせんとおもひしとてしきまて法花、汝
すゝめいてうたてうあゝせも同じ法正伝
法ちゑ法せいかうき一つとしてかはをゆふ
生まるゝ宗の法ひとつあるによて法花ます
とりあへ

才　でうもを仰とやうに法門を生じまゝぞ
ちしいんやうけりくわいの花をもてう

師　てうそ法名を生じまうと申せる時くる
のわさのやうにいやしく相つくうす
そひうろうり法体こそ志ゝさしとくるれ
ありもうくの法体も法花まゝせまじ
てうを法名を生じまうするなつうちのと

あらすいつあるつてうをのくいうとむ名ん
のあんてくめんとどうそ生じまうて
此依くるのうちすゝち名よんをうつは
あうを

弟　たらひとりて此依をせしあうりまうす
け羊すや

師　ぬうをするかう一のたらへと云てかうみてむ
うす時に我らうけのそもてよううふうこしとく
法をてしるめて生法名のなつきさ法
吾方法をよ法名の名んてへてめんこう
むかひあう時かくみまうけのうはううこうく
よ法名人と方すまよひこしををおん

しかるゆへくらうすしよふかうをもつてはからひ
てらぜいつまよてかゝりたまふなり故よて
うちそめて生まれて御しきたんしやうそ
御座候

弟 第三のおふちいことはいつさんこるをやと
ござ候ていろふせんなりをもあるまじきや

師 よくきゝわけられすそ
てうちそめてよの志の御ありて御座ます
てうそいつまよきゝていろせんなりとあの御
たいらひまよそひて我おらふくたなるかへ
さらぶ志の名をもし志の御あまとけおなそ
給ひて志の人とかまをなくて大てうそ

そ御座候ます御かいつりをかへすなくいろ
し御しりてうちそて御座ますつせいろふせん
さんたまりやよりむまれさせ給ひてすさ
あしとこりなるゝ人は御出世の人の志つさ
りそのすなあめをたまはすいつまつさんとの御
きこくそりて外いかすするまてすいつろ
さんとりやとさまりてやなるゝ同く
御母いろふせんを人ろの不徳をのそて清くい
ふんるまさ御ら故よ御たんしやうのなと
てともの御くのいろふせんなそて御座ます

弟 第一のいろちいこらん志よいつしてかわるとい
てゝやくまけこへくろそまうけられ進

死し、御法くわんよむさめらきあまつらんとは
作らるすそ
師 法をせときろもしとてしもとて法府ます
法ふいつやくさとけろくへ由すとけむ
給ふすとゆごてくへてそ法府由を法ふらん
志よいつこゝ志ゆこ有月代よ法志ゆしの
とるを云ふ人ろの料をくろ法ぜん為よく
ろをよろけられ死しおのことゆ也
弟 人まそ法府ます不ハ作と指よ死しおうそ
師 田ちひよさおその法ふハ法おふ慈よと法
多作ふとろ多き法筆す人ともつとまつ法
ふの白に法ハ法名おろにろ多き死し然ハ

法くらんにおさめられまつらん事なし
弟 ても、といづれよ人おのでうす御ハ人ろの料よ
對せられくろを不死しまいすん作の所そや
料を徒のふつともの所おろしや
師 指ともろて名をまへ大けくろをの所ハあ
まくのさつてまよりて弟一さつおしの所を
志つひとろさるまし
弟 そこつての因せしくをまそし法へ
師 まつ徒よ對せられそその法大切の深くも
おそくしきうくを合つ方まつとも以て
てうもを法大切よ自するまも由つかつらん
かる之志ろ人料の深くさよくましましぬ

させ給ふ為にておはしてこそよくましますぞ給ひ
弥陀のとりて哉かきつとの法いかさここをも
かまたへ之ころには法思の法をかをとあん
を法思いとかりなすくさ為あまをお哉て
てらとうかとのまおてとごとへ法いとして
だうりもあまく哉のまとてらくさえを
法思とて又念づとなりましさら哉之応え
てらとの志ゆとちからのてしまし
ますす人々も拝みさしたまの今の法らき
為つしと念ず志ち給はん人々為之我哉い法
まさせとうかしてらとの法をして
南無まかせそりてしとうかその法拝しいすよ

まづ南無と申すはただ我等が拝を法力とたのむ
くてを給ひて志ゆくさぬくのうやくの
志ると法くして法力にかけ奉り給そてし
人にい来りは善悪のちぢの本の意をとりて
我等がせんそをただたりとすまししへいとてもの
拝とのそつさい人々を我が志んさいようし
うるこころし法人々をのあまりかがやき
とりててんまんでをとしまいこさえてでを
いつとよ申すますてつを法力をまさしまし
とりてつきの志ゆきやしと拝光のまなもし
たらいてでを給ひ志ゆしけるの身しとうし
じん為に法なかくおでますかわしたる

ゆへ御弟子の学問と云ふてのことならで
なき其の此ま義理に對し陸しく人ゝの道に
らくらけ陸は死し陸いんとの法はせして
御座ませし

才 弟子のおたちいこ天地のそこへわたり陸は首
月よりも今へ出でぬと云ふ事なく御なる法
是そ

師 法をせとき申しとくらるはまて死す陸へを
ゆゆまもん天地のそこへわたる之むり
の善人並ゆゑの法と云ふては我をせざる
事けれは御が敵に天地のそこにとめてこ
法出世とせらなるまし、くとめこと也

其の為よこそ可てわては陸善人並のおき
またとそらをめし出でさる君おて

才 法を せとそおもしとの法おりもの事て
まる天地のそこに云ふ御さる可そ

師 天地のそこは 四極の可おて才一のそこえ
おん色るのとひ天補とそとしとして有り
しる神まそ死し、わさいほん末のおゐる道
二るとそこしこと上よりたしてきよとそか
さとてお道をして我なる人のおよさ現無
そてたさゆる神とくるとの作くのひとし
なそれるとくらしてめよねわるへきゐるこそ
君二哉とう曲 可まて三味わる也

さよの給ふ事のありかたさよそれかしも
うけとして いまさとりをひらく時は たつとくおほ
しめさ国に死する者のはかなき事をもしほかなしくおほえ
かのよくあらんの世にと云事はしらすさて
の善人悪人浄土出世とまちかへあれはよる事は
浄土をせつきやうしておもひ給はさんとする事
のあさ海をせしらるるとおもひよるなり

弟 さて問ふ事かへつてそれかし ほいなう候すそ

師 せられたるをあて浄土のまへの時きく浄
あとまま浄土仏をしるゝ給ひ浄土の心
さへこふ浄土あとまゆくらんとおもひ給ひ
さ浄土さひよるかへつて給ひしとあるにゆ座

其身こそくるしみとあしと大きにたんゑまて
とかふすしはあかちこえあてはゆへ

弟 其六のゆかちにあとよそ給ひ聞するは時ひ
まつてうとさあてれの浄土にちかう志まきと
云すいゆかうすそ

師 浄土をせよときかしとさかへつて給ひて極人
まそ浄座をする浄仏と信す五つよりて給ひへと
浄土てうを縁のへおとさのくらしておもと
つよしうかとおとくきしこのたするく
らしおもとかくへまつく仏道

弟 仏とて浄者ならしまつとんやそてしと
と浄者なしと云すりまく

師 てしそれならてそれ法事ささしそれあゆるを始をよ
法をよとりまんかけをも法をせさき
ましく人まそ 法をきす法不よ法のあく
志よ法の人とのくらしてあまゆきをしる
くらしてあをちんかふみちてあをかしやう
いとくちしふさくしてみまるせかくのこえく
やまうこ

才 才七のあぶちいこ生死の人をたくしそなあ
法以人為よあまあるまてしと云ことを

師 何しろ志さいそ
法をせさとさもしと世事のたゆを示る志ゆい
その日一さいの人るの所作を法さしめらる

衆生てそましく正念して無ていの法あん
無人を人法以ん為ほてしともそ法をます
法ありにとよくす人にて法をきすゆえて
あひるさいいくましとけりて法いて本まく
よろきまてしとやう 師之

才 才八のあぶちいことをいつろさんを人さんた
ゑけまてしやらとうつらを法し死ろとを

師 何すそ
法あぶちいこに二のすしきめしあるこ一つよ
ゑいつろさんをいてしそをあそれいつを
法ありを法いそそろ法 正法 法ち云法せいつをき
法音際よふせうしくさり所めの所まきり

なにて聴聞申す候とも信をとられとの事にて候へば
わきまへて聴聞申すべく念仏申して
の時は念仏申してもいせときかしとは
信心まことの念仏のこころを申してありて
しまる時のよろこびたんのくんしゆとなる
ありがたきは一味世界の信心よりおこるなり
ことに二つの御こころを知めんとよろこぶ
たのみそかからぬ知らぬものおこなり
ゆへにそて聴聞申すべし 又は念仏申してとかた
ありがたく念仏とてとのよろこびたる
とてもとても念仏申して信心をせす
南無阿弥陀と念仏とこころをとりてさんとなる

よき法にておきあそはされさんとこそ
まことをいはゞ信心と申してすゝ聴聞ま
されこそは念仏申しやとまかせ申すべけ
いへきこさるゝ

弟

弟子のおもいこゝろをまつりなし
まことに候ふつるぞ

師

とのくるとも念仏申しやのめん
がかりそれてたのひよひそをさるめんとす
の御力のつゝくことと念仏の人三寸庭中
南無阿弥陀の御こころよのく精
ねむさけまてやのめんがたとおもひ候
まことよとつかまとなる御をそ

扨ハ清ミせをまゐらせしとかくひきへあけまさを
清さうまわせの御しよとぞ清功力を我ホ
まかせうて給ひ又我ホか彼志らとかうひ内
功力あるとあらゆるよの御恩またせけ
まつ給へ

弟 第十のあるちいこ科ハ清ゆるしと給へ
しらすそ

師 てうちいすと申ふて人志やう本のさかうえ
とゝとめてかくさとらん給ひ科をゆるし
おやまらて宮の神の清ゆるし玉ふすれ
さんたゑけれしやのぎあるとや給へ

弟 第十一のあるちいこにくたいのよミかへるさ
まとへ知りますそ

師 最後のとうま志ゆいその日一さいへの知は
まいんへはのに知らるゝとさらいそ清
旅ます へ知と是とのらうを御のたまみうえ
かうま我等よろて為るゝ知御由のくらうまいらせ
と知せまて合力とあまりはまりし此のミけ
入りんへ其のまやうらるかあ由のくらゐしまして
神の合力とかまうら御衍と抱きてゆへと
云給へ

弟 第十二のあるちいこをうまさ一新とへ師
とおりますそ

師 御由我ぐらかへつ尽らる志ゆらぞぜまふの

はい人の二歳の子ぐらいすおみかしなと云
事也たゞし昔無二のりやうにからく
を私はせんちよしとおしきたるたんしは
一とおなくおん屋ろのくるしきをうけてな
かつへかつさまでてうらさきらしくんれ
あるとをしてたのしいをまなびて西さいの前
楽しと云つべし候之

弟　てゝその無德を似て始のしたも清せをも
きゝしとの此世ゞ世なされ致し始ひらきかた
まつてもいつはすくも見ることちゆけもこと
うりつよのおふちはごとゝと見るまするけも
然と枯よ信しまうへきや

師　悲者のすいみてろすかしと云へ文でしとある
修けまでとて信せをしてけなす之
それにつて眼とゐてみとみろうきとはいそ
そのおふちいこすいきとたつるするす之

才　てゝそろを修けすゆと云すしん眼への修之
そく

師　をいつろさんとしるを存ひきまゝさんたけ
きしやらとうくのことく蔵へすぎ人ひさん
たゞけましやをいつろさんこゝろをおさめられ
まずうするきを治むひのすことをそしけれ
苦労者之

一 第七 でうすの御おきての十の
まんだめんとの事

弟 右まんだめんとやうらくきりしてゝでうすへおもてとこふまゝ
給しなるかる為に所有する候とありけ給ひ
しゝと言者を信じてもちゐる所を教へ給へ

師 だりつ為に御おきてのまんだめんとこそ
だろけまいやのまんだめんとを書て同しく
あつてそくつきさる為といりうる辞を納すべき也

弟 御おきてのまんだめんとゝいふハいくヶ条あるや

師 十ヶ条也 是を二ツにわかる也 初の三ヶ条ハ
でうすの御いくわうにあたるをもとゝして七ヶ条
ハわれとともだちの為也

第一 御一体のでうすをうやまひたつとひ
奉るべし

第二 でうすの御名にかけてむなしきちかひ
すべからず

第三 どみんごいわひ日を御つとめあるべし

第四 御父母にかうかうすべし

第五 人をころすべからず

第六 ぢやいんをおかすべからず

第七 ちうたうすべからず

第八 人にざんげんをかくべからず

第九 他のつまを恋すべからず

第十 他の宝をみだりにのぞむべからず

右此十ヶ条はたゞ二ヶ条までは備るべき也まん
だく法一ケ所のてうをもつて万すまこえてゆち切
ようくましむするゆへ二ヶ条秘方のごとく
かろしとおもへと云よし之

才 才一のせんさめんとして作し捨よ法をもむ
何さんや

師 其のてうを法一ケ所とたゝえなすて法がしこう
とゆきんてくるまつる法会秘してゆ何ん
かしとたのもしくもなすて秘事あるらし
のもみもとして法席させてはぶのすと
都て事のへてうとのごとく法儀の地と
すくまいさるとりて此せんためんとさたと

法花経

才 いふせんさんとは何人をかのへおとを
とたゝえなすらんゆへあるべきや

師 てうとのごとくこゝろをなすをたてゝてうを
のがさとゆうて現世にて其約束と残をゆひ
さとくえる法花経とおさまりゆへ命を
うしてくての法をゆひせうよけひおふえて
秘事ありゆへるをおしもてりうひなるべし

才 才二の備へめんとといふおもてまゆるべきや

師 其の事すといらへさ事なるをわいちうひ
ととふらすおさとゆうて此まゝてめんともせず
りうく

ゝし

弟　志ちからひをとゝらるとん約すそし

師　いろはとも志をおかつせいとんとこうす
会志ゟいろはとうしとうたかりしきうすよ
ちからひをおもとすいてゝしをときよりとんの
紗掛よたそてよふらてたゝひろきすおを
ともりつゝる料しきたりて之

弟　よくせる事よせつらんとするとん約すそ

師　たちひ志せるすふせいとんと味同ともとこ是とと
くせるすふおつらんとさいとくの志おきよ
そりつゝる料り座ふおる料ふなのせる者之
たるてともふる料とたるさんしとのちからひおる
てりつする料とおる座ふおる料とたるさん

そのちからひをおもはへよおゆるとせる者之

弟　いおふへをは時とん約すそ

師　たらひ志去よとくせるすふせいとんとこる
とえもいてさるふ時よちからひをおすいまよ
よそてりつゝる料たんおてとを於もとをへ
よおるふ料とおりくまおるへくをと

弟　てゝとるとりふ　おのゆよおかけてせいとん
とちりすおるとや

師　おりくおるとたらへてるるとへゆるときよる
会志さきすふかけそり我り倉のおるそわい
つきの俗俗のゆよみてちからひをとゆす
しおるし

才　そのせいもんをとなへまいらする為のたしなみある
ことあるや。

師　御経にせいもんせさせらるゝやうにたしなむべし

才　然らば何のこゝろをこしらゆる為いかゞ
なるべきや

師　志んと云ふ志んじんと云ふはふかくこゝろひらかし
いつちやうにおぼしめしたくひ之

才　才三のきゝめんとてそ仏にもかける
つきや

師　そもまゐる二のすかた一つ心こそ
とあげまゐらするを御ゆるしのひの日の
御ゆるしあるまじ之たくしのかきあはせの

時に御誓をまもりこそと拝みまいらせますまで
二十日の朝の日まで一度のみいさきを御身に
をはりまで御ゆるしありてこそまゝにひかへ
とふなる志きいまだ時にだめすすこし拝
まゐるを

才　才君の御心めんとしてそ仏にもまゐる人々
たやゝきゝ志てこゝろへしと申すやまし

師　いとうしろしきまゝ時に力をそゆるすゝ人の
下々る者へ其方の心へ人を御ゆるしある
人にゆるしの其方にゆるをまゐるそて
きゝめんとをまゐる之

才　父母と人に御ゆるしある人々を拝みまゐらする

とせうそれに對しまん時と淺きこゝろあり

師 物やまんつゝしみへからく淺くゆかしと云すん
拝まぬかゝうすといゑるまん時の心すゝ
てもとの信ありてもそれむしそもれといふを
まん時のすゝみあるを

弟 弟子のまこゝろんとをそ仏とまかりへきや

師 人に對してあしくとゝをかさうとかいせときおさすへき
情けをさほの無すと人のまことのそですよ
ろこゝろさるをりてたりる者を蔵は我ぞから
かろしをいはてもその情う淺しよ儘
ゝ有へき也

弟 まこゝへとてもひきつみん節とせられるこそ淺き時

かもしきや

師 とくさする志さいまて我か志んて〳〵とうる者也
をそかひとうりすとけきをくさする志さうるも
さ時とゝろそすけいもたひとへとくまるさる志
さいまさてと我か志んさいそれかさ者を
そころをしおかれとの情はまさあり

弟 人のさよ無すとのそまのさきといかた〳〵ふそ

師 かゝしとに對していゝんを海くとあしくてしとか
とく我ひ我は中をたいひとくてすとりいさ
まれは海をかへとそもしく傾也

弟 弟子のまことへんとをそ仏とたてろへきや

師 こゝとこ病をいそうへんよりよさるおゆかんとうん

の科をおかす（へからさる）人はこゝろなきおかす
まして同じき科也

弟 何とてこそ本願をもつて宣ひたるを
のそむすら同じき科とおもふ人をや

師 念仏のそむすら科なれことそまいすれ
のまことめんとをやうるの科也

弟 さまてめんとをたりつるのたゝるとおもふべき
なりん

師 あまこのすゝむ科まくるものゝとゆへおく
すそてゝせさるすあしとてともしらず
をやむるすこひのでこひのさうしを
よきすこひのえこひとゝ見すけよをのそ
きらさるなり

弟 弟七のまことめんことを何とたすくるつるや

師 他人の財宝を何るとしとるの国ならく
してぬすむとおもひそくすともあるべからず
人をもばかのすとをしめとを合わせを
そたるとを科るへしとをそ

弟 人の物をぬすむたくをのすんはまことめんと
をやうる科ともおもへや

師 科なきそてそまいは弟十八条目のまことめん
こゝろむくおもの科也

弟 弟いのまことめんを何とたりつるや

師 人のきんけんとりけとそまうけと人の

かくれなき物にもあらずすでに悪念とさへ大
きんの科をひきうくるすへをおもてとて
つみきる人にはけしからぬことわけなるのと
よしやともせせそよろんとうへをも

弟　第九のまんだめんとをば何と御談義を
へさそ

師　他人のつまと恋せよともかりにもおもふ
すべからずそのゆへはせんらんのまうし邪ゐんに
をさせよとのそれにそれをもつてもひとしさへなく
もつともとうへのことを

弟　せんらんの邪ゐんのだうりをびとこと科を
さするや

師　をのれかつまにもあらぬ人にこゝろをそへとも
他の妻にかゝりて邪ゐんをなす者をしへさを
邪ゐんにさそはれてかりそめにもおもふへからず
此科とする也

弟　第十のまんだめんとをば何と御だんぎなされ候

師　他人の財宝をもとめのぞむべからず

弟　ともかく十ケ条のまんだめんと二つにきはまると
申すはいかにその二つとはいかにとする此

師　第一にはでうすを万事にこえて大切に思ひたてまつる
ことゝ我身のことくほかをおもふこと是也
に勤むべき也

弟　万事にこえてでうすを大切に思ひ奉れとやうに沽

師 ある人のいはれけるハ、さてや
貧富ハ生レ父母の家にかゝはらず対して
てあいとの情をさいて自をも世を見て
たゞ一人の思ふ所の理ハ見るへきにまかせ
爲之
弟 て、人との情ださせて何をさとりぬる為のたよりに
候はんや
師 さる事ハ和歌にこと之とて、かしこき御やうをたゞさ
ある事て、しかして人との情を見と事にかけし
情といふ事と其上け学ぶるへし、又その自情ださせても
そのへ身にして、情は因縁によつて、ひとり分相にかなふ
さいはひの為に情まりつるを彩を身をたすへし
よくとやよて
弟 我きめんもあるらうとよと何によてむかしの為にハ
何すとよんへきや
師 まろ我さ海よりも自のこゝちとことて不留
とのさしやうとし あつせるとらの情我と
こゝろひとつそこゝひ事をおもしくかくさ
それて進退をあくさわんとおりひきくてあ
ゆかうりのおもしよとよあくつを考之
弟 かうしとも我らかのこゝくわしと様にお
ゆるつきや
師 てらとの情おもさて思ひてきかゝの為にのそ
ひかてのよとをすをかろしとは対して

とのそしんさそ若き

才 てうとの清おさてるまてらわてとらいうそすろ

すそ

帥 そてるまもとあるてうとの清おさてれども

きてかわしとの為よ初すあるとしとのそ

むしとさんたとひ我身の為のそすし

そすあるとしまとしとこ身のこころくるしき

まてと許りやふわくとたくとこ身をうくむ

こころくまかわしともりくむしまし

○才九清母さんとおけましやの

四おさての事

才 てうとの清おさてのまさめんてとまるや

あかり給いぬとえさんなおけましやの

まさめんとさいわん

帥 おけましやのまさめんをいあかるとも同こ

まさめんとよまてそうの生けましやふあると

ふうすもあるを見ゆらむまるをよろこぶ世事よ

とおて清まをせとさわらしとのいゐ代まて清

夜まずうわてうの清きさてめのまさめんとこ

見つきいのきわしたんなりてもとてけ見

まさうんとこ人と示て後てさてはるとうろ

まさめんとてあると見ゆきからのかたちをかゝると

まてめか一つ見るとあのきわらしたんなて

としてかゝる御前にてめんとうそうのうけまし
しやよゆきあまくの御前にて万人との中に
もとからを千年めでたけら御めでたき
才一 めでたくこへ何と日よみつぎをたくらく
なりくし
才二 せめて年中の祝をんいさんとや
て
才三 ろもをくらゐにうちなりをとろのきかなめん
とときはうちなりくし
才三 さんさうけましやよのさきはけまつ日
せちのんとねし せちさてもとよふく
ちぎりくをを

才人 四ちすともひてみしあをとはらく
て
才 才一のまくとめんとをく所とくあおもへとそ
師 ころひらくいみいさをたくらなすらうける
わとのちさいあさすらさんとうけまし や
あまいらひまつ日よ一五ゆんよみつさを
あまをとらせてたらなするてしとの広さく
めて
才 さんさうけましやうを いらひまつ日い所
出そや
師 年中のめでたくこゝそわ不のをかまを
あまさをすゆらいらひの日のすゝろり四方

日本国にてきりしたんのつとめをとゝのふれ
まことの道をまもるべし
弟 みいさとは何ぞ
師 これぜずきりしとの御身と御ちと
をりふしさかりひしよとしてさゝげ奉る
てれよ生ちしろ人死したる人の為にさ
けまゐらせさかりひしよ也是は御主ぜずを
きりしとの御一生うけ給ふ御ぱしよとゆめく
わしをたつとび奉りさせらるん為ならんめとも
なり是てそ御主ぜずきりしたんはみいさを
たつとび奉る時御ぎの御でうすにしんどくを持
しゆしんて御たつとび奉る 御主の御内に

ゑけれじやのさからめんとゝ云て七つ
せん時あるべし
弟 一にはこんしよはみいさをたつとび奉る為なり
くだるをもてなすべきや
師 こたるをもつて中にはいさの国に於いては
くぼこうさんとすると申きのすとやむる事
弟 ゑそてれさんちりしきさらめんとゝなへる
たるかせの時のありしよきや
師 中にあつる御をせそそさせしてさんたる
そのよるをもて世界を持めぐらちてくさ
からいてちいすする我等か科を赦給ふ事を
あるとひはおもひしよそ

才 かつてをたしなミせずして河に役者の身もしらずとも
やさしうぞ
師 一きいの人をたすけ給ふんなるよろこびもの也
それにあらしの情をせさせるいとせあつて
ゆきとゞけるをもてありける也
才 さみいさのあたかきをはいしょうりする
ものにていはてはかりける也や
師 さるものとてはこにありて一人情思の情をもとを志
てはかりけるなり二人親かつ彼のいくのひ
としてはかりけるなりこれはなにはやもしは
情思をとらけすん為のかけとる也
才 みいさのさぎつはいしょうして人の誰
とかうかすうも
師 菩薩はいきたかゆゑ人の為斗にあらず
ふうたりもよみかたはふのすまの為になと
あすかたらもとするもの也それによりて生死の
人の為よみいさをたすけあたこのはせなるまい
あるをすら功力とするなり
才 才二のちてめんとも今にてわれさきゆへきそ
師 吾意をとるまでゆかつての旅んまいあるる
それしたんいは情をしたけまーやの情
さてかのこころはいさんとるまる人をと
それあひてはいんと時世をてあさ一年よ
一度くうるこいずまふこえんはいさんとやん

とてもおそれおほき御はなしなれどもさら
ゆるすけいすしてえいさんをとりさそいけ
きゝめんとそんじくまへつるを
弟　何とて世あて一年に一度とは宣ぞ
師　ゆゑんさらけもやう〳〵一度〳〵秋よおつる
こゝくえいさんをと一度とりせてのそる
まもんつて世あて一年に一度二度とせて
かすかな者之ニ御いまの志けくあらゆくらい
こゝのきとよむろこゝくあのおもしあとそ
度くあらゆくまゐりて度はこいさんをやりて
きよむへそすやる之人我ごろおん〳〵そう度ゝん
ゆゑとおさきし御〳〵かつてころやとされかつてなりん

と昔もいたつ時こえいさんをやつて見たれは
よう料をたしけつと時わるき者〳〵ころう
さかりのまゝよをいてへてとの清さとめ
まはてゑいさんと申つきこ
弟　ゑいさんを見て見てもあてもあてもおはいた
まかん時しん何ますそ
師　さ何てもそこよあかい白に申す人々御も
あひすつとこゝへとくきつしたんたれそか我こ
そのゝ一度にえいさんとそくますする
御いさるをとひてん年中に一度ひえいひ
さんとやさすとも此まてめんとそそむく
よらあるとさ度と御らけつ見時ん。えいい

さんとをしんて
弟　さてこんひさんを申為になにたる事なれ
何ぞや
師　肝要なる事二あり一つにはてくろうす二
つには志意やうちきさこあらはすこん
科をのこさず申す事也
弟　何と様につくろふべきや
師　こんひさんを申人我が科をおもひ出すと
て科の清めりと薦ゑへくらさて
おもふきまてそのほかのちきて
よきする事とも思出すやうにて念を
入てこうくわいし我と身のうへにて
あらて我か科をはんさんして
弟　其事とやうちをあらはさん
師　我かたちさる科をあらはさすしてかくす
とも思ひの外に何となる事ともいふにつき
とを我か科をかくさす明らかにさんけに
申ておもひきてさんてするまても
とこそかしめれてそのまゝてうれと
あらはすると思ひて
弟　とがある科をのこさすとはいかん
師　我か身のえてんしやうとこまかにおもふ
かやうにしておもひ出すその科をさんけ
とふすべし

才　こんひさんをよくきよめしといふハなることそ
ちりちりあるや
師　中く何のまろ我らこゝかくゐるゝなりとさん
まつひしよるへをうけしよるなりと同く
ゐまるなりそての御ゆるしをけりそのゝん
くらひしよるへとも御ゆるされをいのけ
なそとうすとさおんとゆるのいまとき
さからめんとのさからめんとをさけまてゐの
さからめんとをのりそる時十字の恩光の
なりよりそあるやまて御恩ゐるやとて
をて二才一所要のすかきてゆるせる
をやらまかくこころ

才　才子のさからめんとを御とくるなとつきそ
師　さきさすかつとらや　御なせとさくりして
御為中すすゝとうをきゝん御恩を頼みれその
ちるいのみきらしたんいい御恩をとてすなる
のみ御よへいとてあこの御ゆるこてまする七ヶ条
ニなるかつとらやとうけするへして
の徳　御きとてそまふこうんへゆしみの御
同るをりその徳する
才　才子のさからめんとをうけとるとも御つきや
師　せいとゆんとやむるゝその言へくらうくんそ
いゝ御きのさうもしたんとす二つとさらうきそれ
まつす御言のせいとゆんとてあけまてや

りとはさはは白せきしゆんはやてみすてしと
の儀也

弟 せきしゆんとやむるとのきさいとんのみちろ
すそ

師 とせきこのかのとき之一ついせきしゆんとするか
なりかくとそゆるかそのみちとのきうくし
からせきしゆんとせさとてもめんとと
やうるふあくを二ろきんらしするの飛之
とふらやましよおうきはくうるかみと時ら
くちの小人めによおんら国人物のるふをそ

弟 きはりをんふゝへためしとそてせきしゆんあの
あてゝ存るとおかゆる時らせきしゆんせさと

てとくるしかくとはしほのきさおかとよろそ
こんへさいろんたは様とて

弟 弟子のまくとかんとふいろんしと

師 このかくさよはてひとうんかとかひの中
とはくくしとの儀也

第十七のとふらう神のこと

弟 てしとの古はおきてのまてかんとこさんた
あけまてやの由とめんとくとふく義あひ
ゐさてよりうくう神はいくはゆうゑ

師 神のきよの事しとふへさゝろつの神の

うんおんとそろ神は古りてつきんけしせん
二るんけんく三うんおんいん云まん志ん
大うんうん志うをうんおうとせうんけさ候
気とえてとゆう神と申候
才 ゆきの神とそうしてかううる神と申す
いゝん
師 とうそ気にりうう神なりとと云へて生
まうとてへまあれ神とそうすあかし
才 とゆうてに云ふいゝきいゝん
師 りうるとも死ぶとこれ气候 何 南
の一名いてことのかうさうとうみけ候くと
候かうる神はあふまの花とそうつふ

まそりうるとも申候 名まことはふさの正体は
をりうすおまて君主に死ぶとされるると
てこ付とゆえあうて訴えはあまたい
御そてるしまとそうるのとさして死を
ふとも候
才 りうる神はふまの為まいゝそうそんて
そうそや
師 ここそんおうてみかうてとつと清絶ぎて
しとそとつとるのもさ清やくそくのく
ちしては人は清きの清ちとりてもとくひすも
我ではふまの名男女まいんへぶのまおうの清
まやとそうらしての清きしらむのゆ功力

とくりつゝる神にけいをしてみてあはれ
さらば法をかし其のせんこんの功徳をとうし
あるべき之

才　りつゝる神とおかす時はいはいてをとうしかやう

師　是毘沙門を本にいはいしてくりつゝる神
とりてゝこそのかうさとうしあつとはたへ
いはいてをとうしあるとこれはいはいてをと
うしあるはいはいてをのまゝいはほあるとくたへ

住　信しすゝめすゆゑそてりつゝる神と
たのうしてとうしたんのびしやもんとそ申
まつらうと

才　りつゝる神とりてゝこそのかうさうしあるい

すゝうよやういてはさけまてやへまうとおかしよ
とやし吾すせんこと被をましみさあすや

師　是こて是毘沙門をあつゝこそ時にはいよくあ
ゆゑとそうこひしおゝしよとやしかの経うを
吾すと是人くき手肝あるまさて成はとを時
あ休あんさるおふ蔵之とかかおすゝるを出ぶ
くうて見おかしてぐいきを我うみとかつる
凡神とこう見ひしいはこ度たちまち両し
さゐ人治まうるとそくさの財宝をとらへすう
あるまたひとそたるたるとそるゝ之

才　そうおゝう神とゆつきあしてあらいかん

師　神いてしとゝ対しそうのらしせんとそる

まうしてまいらせ候ハんか此ゆへは二度申す
ちかしきとおりひきてめやうそうんいきんと
上へさやかくこそおりそ拝とをひかへしもす
是ハえんちるをさんとて拝をゆうさ申へし
才 へこあるころもん御すそ
師 もうすところにてかわさここちこ是にて候
のかつさとくしみいもとまへことてしとのゆ
赤目と法花とくむ左をゆう此まうす
扇よりのうこうのこしとおすふ
才 此きのこうとへこあるとも御覧すれはん
師 へこあるてえハゆうしやにてことよ是さ候
をてこなうるだやさこくゆうしまりまうてへこ

あるとまうし候
才 此ところの法ゆかしと存ぶ候はゞいかん
師 御かさかなんとあるまいて法花経をみいさ
たゞあやまりのおかしよとりしをかのへん
さんとうけあくへつんたくとそこへかりしん
とりてもうそうか仏法とりてそあてゝある
みとてるのおかしよとりとか御ふる本領ま
てゝあきこえちるをさんのまうしとおるしまし
とう時はゆうしまりまうし候
才 是のこえかんとおすふる左の拝とあるをそくへこ
為のだるまをおかるゝ
師 おもくのだるまをおかる 此七の拝よむかしその

吾あまてらすあまのこのかみてんちくらう
のせんちいこすをまりのたしかきえ
才 さてその神よむかし吾へいはせそや
師 あんけいせんよむかしよりさてあて二三
えんくよむかしまてあそてこころさんや
又よむかしよりさてあそてよさんいつ
むかし出ちやさんしやわらさんしきに
むかしてんてんさころたうとよむかし
かまとあそてせんけとひよむかしてことの
清書[illegible]をむちさせんしやうこれけさい
ことをいてしをの清書[illegible]のあるみちちをたるら
かいひたいろのよし

才 あふみのこのかてんしやとて御よそ
師 一ろせそし牛とおもひせとめりしつまやの
せい二ろん物と知てさききゆらさんてんち
えんとこらせいころにくまあらをかよかな
うくなんさあそてとてもらせいさ
才 御とてさとをあまのかてんさやとくとそ
師 あふみにそなりのこのふはちはせいおする
ゆへこさいせいかとてられてはとあふみをを
とふひ納者之さとりてははせのくらく
そうくたしくてたるる
才 丈夫の出せんちいこをいくはあるや
師 あふてさはけんよひせらきんの[illegible]

弟 見せ候とて出ころかゝるぜんちやごすとん
いふ事や

師 是は子のせりふ物いふは女の子の
此子と大のゝ子はける者也

○弟十一さんと云けまてやの
七のさかりさんとのす

弟 江戸を捨るかへさる事にしてすてまする
所のよく物を打ちなるします所でいそを
とりなするもと子伸とをまさゝしくださいます
さ之ト字斗にそ出る事とる物や いふなる

師 それ海つとそまでをなりらたこ事の為にて
たゞ心とのかつさる也

弟 それかさ事そしとよるとたさ海で家ふ作る
ため事や

師 清母さんた云けまてやのさかりさんとを見
せさらめんとすとらそくことゆそうけ
するへ云半肝要也

弟 それさらめんとせんやくにある事や

師 左様をつんそうらすし二さんうんいろまさん
三さん云うらとうやてさんつてさんまでや大
うん云とてまかうんさん六さんたるでさん七
云海ちのとまりによる也

才 さいせいのさかつきんとをとそ作人のさとこそめすそ
師 徳若せよとをましとの徳利のかつきを徳
そうしちんの徳利かしとを我あまちん所ん
あふ徳くめすそ君達
才 そ徳ろめんとすをそ絶え稚れらけなり
てこや
師 おゝすかうとちうはのさかつきんとは徳つかさ
まうるんゆりうする拝ばるこうしくらいのさ
えいさえとやうす尚達よのさかつきめんとを
うらうえなせみそえんちをさえ終りそうく
こすたゝえいさえやまとのてあるを
まりうすぎ

才 いさいせいのさかつきんとの国にすくいとろもそや
師 もうすくにいそうちいととのさかつきんとたゝ
いさうめんをいさうなめくにそなる尚とえ
よのさうらむとをうけなうくきあるにてと
地とそうさ
才 そうらうとととらゆすそ
師 そうらととしさゆうたむにそうるさかつ
めんとえをうそいろそととかつさをとらけ
まをかつきそる拝ととめるすてたらしろ
うそのとうとゆうしおうさかつかむとえを
なあなるとうけなるふとのてのす
才 つなるかくさとりてひさかつめんとえらけ

きゝたく候

師 せめてさきまゆうたのおかしさきまつきこ
だんにかゝんとのそこところにはたしかにとくに
あしいそれかゞをはなせとすらしの咄を
てをたらちおつへきとのつくことおそさ
りうめんとどうくかす所あり

才 さけらうめんとをそうかと様と様けのかて

師 さても様からかのかへりせちてをへの力の
とゝころこそとりうらてともさいらんと咄ゆへい
うふの色とやそうりとみの歌をむすて○これ
かしてうとをあそれはいまよとひのうまを
の咄りをみてかんちと付はするとおめんと
云了ゑを経らんの咄へとはの行の為あまく
付てね田らことてゝうちはぞうんのしるし
この咄とはむつかしくはをいふをつまとゐるはす
ごんちのおもんと云

才 さてくうつてはらんと咄へとおそてそろうぞ
うく咄うろはことてその事をといふ神へとこ
とその間一つみすをおかさてそうぞとかくぶら
神にもらんとて去く咄つてみ法もとりくみと
いつともみつとかけさうなからはうゑのむ
を咄うかれをのてゐりくおかみへぞや

師 この咄をかくあるにかで咄へもんにきこうゆす
ともうけらうそとおもみへかくてと咄とん

それまでて噂のかす肝要之たくしゝそれら
きなきこゝてそゝのめんと云ことをもつ談ハ
そうちとゝとを遊ひうゝる人の名をもとらハ
すゑてうちすことゝ心さをのそみてよ
のことその内一つなをもかくるまとのてん
るうちとてを猿つまりてゐめつゝを

才　さうらすしを猿うるをもそそと棋るなるか
さてや

師　杖生を棋けるまそうきて大くして叶ぬさ
るなり遊まそてけまをひてハまて猿る
こそすさてなかる人まそてそうちす
猿つまてのそむと云つかそれそを旨す

そこ海て我ともしてきなることなるの
心さんなく人まなたひとのるうちけまを
を猿るる大くて棋なるきの者をなしそうら
そへののそを修ゆうなりまそこ我れもそを
為こなし給くたらせる御のことなくらひある
とと肝要之

才　まるうちすもとて侍人の猿けかつそ

師　この修つてそゝうちそもを猿るるかそ
あてまの人ゝさてなる心さ依てめんとら
在々と棋る為つそくしてけいさるなきと
御猿ゝせをまつりしてら色てなるそれのゝ
さ所ゐそていたそこをなくゝらゝ花さう

めんとを授くる者はゆるしとなんすそ
御扶け様くるすに付給ふ是又法を世にひろめ
ことをのかゝこく是をうけ奉るべき
為と右の所望する儀をたりつとそのてん
のすちゝおそれのなき所ろそて此様け奉り
くいあすあれさをりしたんいは後をと
さうちもてと授くる者と申ゆへさうゐ也

弟　第二のはなるめんとは何ぞや
師　こんいるまさんのさからめんと是也とえを
まちゆとどろうこそうちもてと授くる
人にひとかうと様けあふさうるもとも此
さうめんととかそてくさるをあたくしを

かうさどらんはいそうちもしの時うけるはい
そそと他ろはいゝろくを時にてんすの
おうをひそてもとあうが受る後力をえん
まつはるめんとこ是はさうめんとの
後儀也

弟　第三のさうめんとを云物すそ
師　こむにあんとも云ゑうかりすちやとも
やすさうめんと也

弟　ひさうめんとの主さいとあし候へ
師　ひさうめんとはいしちやうのうちにてまよ
そねたことへこの（ちれわ）れあそれ
さんさと行ひする時授くせとさゆうしとの

ちきふ義へ申す時にこそとかくとも申さめ
ちやの道嗜み候へと申ますそくらのは
は申にせとてきりしこの事の請にと申
りやうか候ゆへつて申すまゝの一分さうの酒は
せとそへしこの事の請ちと如りらまとす
と信とそうす肝要ぞとこそとまつるとへんにむ
さうの酒の多りあらうののにに請をせとを
そうしての請は御見候こそ請申すこく
こふ老に請住とぞそれにてちきふせとを
そうしとのそんたいとたらるるこく
せくりとうもぞさうめんとどうやまひ申す
せんかうそ

才 あんとむさうの酒はせとをそへしとの申なり
と請ちに如りらまとすけ物とけ一さ申
こ多りとも味ひ見んぞまてふつうの酒の多
り味ひもおこたり申してまてある事を
さたらをしらつるそそうま
師 候てこそさ請ら申んとれむらしこそ申の
みすてつまふさり申さうこそ事のとなし
あつすけ申すと又九事のこゝろこそ請
庭すす請をせとそきとしてくの如く
義へずつ上へとこ一とうたりつと信とそうす
当にさ其の仮とさんてそけまゝしやうらま義
へ請ひ人請をせとてこしとさ請ふらめん

この書そうすをあつかいし酒げん為よふ
なるをもちやうばいにて樽との清きとくと
あつかいすまつ者之我か昭らんとふそう
の酒とのきみ見るな志きいわなの役なすかた
其かおくちいひとんくふもかの子くく之清
酒ますすらそくらんとふさうの酒の之昭
まかつる者之我也ていそてとのいちをもそて
信すりしいなるんとふそうの多分のおもえ
とふそうの正体にみさみなたる清きせききさ
申しとのもとの清名の体と清ちのまちて
清酒ますす

米
まんの多分味ひの下にせすきうるしとの此文
分清酒まづふそうの酒の多分味ひの下に
清ち清酒ますといへふすかりてまで
とこらく清清酒ますせとさうしとの清
多分いるとすに清酒ますす清ちにこそ童
なるや

師
さ候うあるとそそもといつてそこそこらやに
とりをとにと清きせをもらふしとの清分々
い清ちをにるされ候得すしてそれは清酒ま
そこらくうるを清酒ますすさてとみかつく
なるとにそしてを清ちとみしまつ時ともちん
清分をそふまつまらそてはそうるをみき清
もしなんのきさそつまよみもわいなりるにい

ささらさらさらやさとさらてすのよまかつく
みさんと過へよくあつしとさすへ若みてこ
法こころの法せいてさとそえんの云御は
法うせとさ申しての花んさいよ八ちらん
乃法ひやさうの消の云御も法うの法ちて
あつとりりてよつへ若みてさるてみつ法う佐色
さ申しし法みうかつよるしるかへて法ひ
て法法名号と法ちちとろくつましまさ
さ為う称てをさらやをみとるとすつてる
まそて法花経すすみる若みてたくとさら
やて法ちちと法名号まて法花経すすへ
名とさくし法ちちと法名号もなて法花

出す之

井

はさらめんとい法うせとさ申しし法御て
て法海印の乃同時てあすくのとさら
やあすくの所て出し法すらい佐とよる
うそ

師

そうさんとつとこ之とさ乃うは飯とわを
まへうるへさ為て一つのたとへあつと佐為
とあきー一の私とあすくのうきのあるく
よとりて佐れのかくさてをさらくら法う
なうるさえうくのこうくするとさえそ
まりてやいさん万すけひすらえのてうとさて
てまし出す法うせとさ申しし乃法名号法

扨そてましますとてとゝとあまたの三郎殿
てあまたのものともや一法花経ましますうけ給はる
まじきや
才　ともからやと三千ちけ方は法花せともなく
この法花経しろをあらはすもや
師　その経とあくとてともからやさいく法花そてし
法花の法花経とうけたまはりすみりはあらそを
たつとともからやのあらしまわりそてあらて地
しきます之たとつそやすけのうちまするかるを
ともんくふうりともへ大きそうけとうろ
うらおつとたらくもののそしくことおかすけ
いまうくう法花つうこうくあらま

才　せとときかしとの法たけいよのつ経のへかと
きしませりまちはさことすらやていはれとて
あつくこ法をあそてそや
師　けそうるとましまきるきうめんとふか法くら
のとのみとそてのよそうとあかてことさま人
ととるいつさうのそうなく法さつりま
くさつりとふそて信しさうすするに経れもと
いつ九右のうくらのたらへとふてともなこ法
きことまつて内丁右のとつふこてしくかく
みのさまてちいきさあのうち九それみうれ
ふわうへのさけりて如わいるよゐてことたい
きんよてもあれのうことうつ為之かいはかの

なにへかくのごとくなるよとひてんいんいうを
そてましますにきこせそろとのゆへ
おもひおかしまいらすもちいさきをもらや
よこすなるをいはいんすけひ給ひすとりしまして
ゆきさんやたらしひたらへとてとこのまゝ
まおりつくしを給へかつきえんとおもて
みけのきうはしとしだいとらやうえはたの
清通御志くちさうはるとましまする者
米ひけりめんと苦を植ようけをる前に
修業とらはらへきや
仰ともろ拝をたらしるおもかてみなる
拝あるもいはこそまもとうんのうへさる

よとひていはをこふくひとめてさんけする
来るよとおおのよのゆやらんらとのうゆく
ひゆとまいらとろしきろうるをまゆまいは
をりらゆるすめつてをけしとうらけまる
すけはるさんひさかつめんとを様つまさるらん
時はをきあかつてらせ法をきつきくらなと
やてひさらめんとたつるをまへ法をく徒
そてましみすそしとみ事とをあんいつくろを
い殺すに対せられて様ものをしやくとをけさ
せるも法るる法はらめつるさまする法恩
の事きをへつまかへるまする肝要なりとえらけ
なりてるとも我か阿に海にまうを経ひし法

見を深く多い人稽もして結構なといふとま
で

才 半弐十箇目のさうめんとん作すれ

師 是でんしやのさうめんでこそ見事てうら
そしときれかねて作法あれまのやまし
と千る桿をるとさいつをいつれおかの
らうやく也

才 是でんしやいつくれはさそつけるや

師 それはさ程まう御座之てんえちるさんとて弁
内こしろつゆ之二ふるえんいさんとてことそ
よてえんけるとろ筋之三ふるさてらうたさんと
て前後とりて桿をくつさとをるこそ宜之

才 天竺のえんちるとさんと作と稽は様へこそ

師 てうを討しまでてたらしろ桿を天
竺よるの拠を討をとりてえいさんを
阿弥陀るを拝りける桿をたらすす天
ましきとのれちさかくことえへ弁桿
のれくのいと様をとりて天竺よ奉するこ之

才 えいさんとる作と稽よりへさぞ

師 まる御そやえいさんおこそたらすし
の御座の桿すると付まてのすとやて一
夜そて作法のえいさんおこそおのえい
さえるまえを付まてたらしろ桿のとをを
志あんして一ものこさ弁すやしす肝要之

すの為に右の九ヶ条目にあたるやうにす
をたりて
弟 こんちりさんとは何ぞ
師 我おかす科の後くのひを悔せさてとき是は我おかすこゝろ
つゝての念するにおいて我おかうこゝろに
然中のいとこゝでおそしてもらうを様け科
とところとりそこうのゆるし者
弟 弟子のゆるしめんとは何ぞ
師 前をてをまうんさんとしてひとをからす覚
外事をたきしのをとりてされにるをなすこゝろ
めんを之はさらめんとはなるにのゑんそひ
やうゐんのことに様けまうさらめんと遂はさ
らめんとゝとりそ怠させとするしと儀
からさとおとへ様ひあるまゐつきする科の
科をとをなやるゐつてん書のうへきと
義を様まこてへんらるゝ清力をとくへまつき
らめんと之
弟 才(?)云のさらめんとは何ぞ
師 お(?)ほてんをまさらめんと之はさらめんと
とりていとそかるときせなさしてとさらめん
ともる様くる儀ある人とよろつ者之はさらめ之
とそとはる事なる人くいそやくとちをやう
に清とむ為るに清るせさきあもしてと(?)
かさとらへすつ清らめんと之

才　扨そのさうめんとこそ仰すれそ
師　まつそれよりのさうめんとこそいさかう
めんといふ事けさんの法をとくのこまく
法をもまうくるもうきをもつて冊にみ
おさへてもうるを表すつみ法をちらのそう
あまうせおそんさんもうの為にかつきを
ちんかうさうらんを之
才　そ付やうみたらいにせとしてけいさうそその
きぎとまうとうやくそくの儀あるへく
師　老まいまつての事ん之たらいにせとしてけ
いのこのいびしをやくそくあるをつらん一夜
さんをむもつてけんうへにおもて上品

しんのへてまし仰すかつてけいさうる
老之そもとめ給まそうる生徒まちまそまう
かりのそやはそくいはさかひこいはすてとおつて
津うそうしそこのかくこちうちとみまさ之
才　さおまつそこそひし法をもてめ之とおんた
ひいこそこあいはさるうあらん付とて法へと
ふすけいさるそこの法表へたてるこうて之
師　それとしてかくうそすうるとえへゆるしいふ
こうてまちつまうつよりのさんとむもつ付ててとも
ぬるさんへおさるてもかつかこの法力をいそそ達
なさかうかさうのひこ法を大切にむもひあい
そひとうる為まおさそる法力をそうんへたさ

ゆう者之を役投まさせん之竹まのさるをかたん
とはさらめんとをみけするとみそふゝ母の
あはとたらひにわすれしてあをかうそてそれ
ゆくゆうすゑを清力にてそのすゑあゝまゐ

米　てしを何とそて一さをぶんをもとはてるをこられ
さらぶ給ふさてめすらん

師　ゆはさてめをとすすすおよゆうとたらひに科
あくまそてまきんらんまあらしふてぶ清た
ぎてまはいするとりてそするはやうるまそて
陰生を桂とそよふら母たらひに一方の如く
なりひあはつらまよあらんは力とそんゆん
為之は給をきせん為にはかひをそらそてけれ

さふ給ふれてみゆくちきさてさんとわ此くをを
とし子まそうとよすんものあはうたりをそてん
おとこはさんそふるきとこさてさんおかはたとこそ
あをとそをふしやの国をうしとやとそそする
くそはそのきうんしそか候ろうちきよ
ゆうん时もとういにたらをそうすまくうを
おもそひやそのまきうてあんそのけしか
みくれも下みうそしもとん我ゝみとそこは
ふすよ清とてとをのふそく出来てしそれ
とゆうかとさよりしさとあいさる时ものまて
はまつをゆすけてをひてなそそさるまみ
ひしゆ文に終ひてもせ母にそひうそ目を

堂へ入せ給ふに母み信き給ひおこなひ給ふとありて
いかなるこの御はよろこひのくつうやうの御
そくわうんゐよい候はすそうだんねちきうと
かくんてもきをさきの深き太切とて御
そくおとく候よそこ候するけ御へかとるとき
よくきあんとくりんて みなをとしてん代との
理まりれうこて世ことおもの給とみ
北をもを白状ちをもをしやう御の中ともて
のかりきりこれそておれて我の女子のた
そこをそうたして我の一言のことすりと
ふとこの中をさるり色を悉理をまん
物為て所をもりるのさひまやうある悲よせ

ちまちをせあぶのうんと見ぶあまりたりはま
てとろのやてくれてもてもいそくきうしの
あるまてきたりいそうするを悟ありたまへ
てときて人とのを度りありを出候あのそんを
見候はまありをしあん候ひはたりひはうしんと御
くれせ残いこうも候んをもんせんりあせるい
ふあつりうきを一さんたらひまきをろしてた
もをとにはんてともうをくくをけんそくの
因るをあるてきまりあるあまる者をあかし
こうだめしもてんんにおもいさるせんちよ
のとそおきありとはかいかるかる苦を
足路りかとうくまする名理をさつてあか

かくのごとくのきびしくはたらきてらんとて
そも身のためならずとはからひとおもひて功なり君か
かるべし さて我がきさきさはんけいさうか
君に仕へとまさにてそつとくべきやか様の君を
隠さしとてやすくそのけのやくせんなきに
あらしつまさといせさらんにいを功なり君あれ
かるべし
師 さてあらんみちをしる紀といへはそれそうして世ゝ
のことを行のこころをとおもはをさくてもる時
万人の徳をそのなてそととく君に
をしと國に入まして万人の為にえさせて所を
おも我が為にはしらしさうかあることを功

君に事て たゞへ國中なる佛國へ八萬を
出をするにはくをもてのこころにもよりて向ふ時
たがひくおもふことをする君の為なれば忠やうなる
そうしてくるをもいへ大きに國の為にもならず務
のことはいふをぬくてうちとると捧げまいらせお
きてもあまり務くて人の徳と故へきすまとてち
まことまいらする理に隠てきてめをとをすり君この
由ちをもわろのよのさいめんをとをそ行まて
人皆徳を隠しとくにへ大きに國々て理をとを
もし何ともとをしてかくをとこのむ君ならせう
しかるべし
弟 たゞその理をうけ給りてあるまじきを明らか

ひとつとして人をたのむとしいをこうしや
つきる一つのすゝろ様やて志のつらちうよ
をいてとしいをかとこゝろ人をそへふりあねらん
きやうにそは候さてうて候はすあつき
とあるとはとやうえさいあしてき人え二人の國
御さすそてて法志様ありき方ちうしとそて
はゆとすくさやそ返とてて皇へつとてあすは
おりさや

詞

見しとと所あるのきしん之めしたるとをして
おさけすてやの候さてめのむ様よ道をせくら
いこさ中をせも有すしけ返されとあかつて
つゝしてしよの人よちうと合すんけいはそ見し

猿にてそのすゝきをめ御しと云よか様のいて
候ゝぬ者には中の御海をねと給ふ本よ候て
せし本の候さそん志うとし也と又さてそて
毛蔵をわさいひおうんう為よあるふさを
こいせさ御様よとさとてめとをさてこ

才

見とくもすり臣とせ御を経申してするや
かよんのやみをそふし之たくとの候蔵への程
みりと候さて志あんをくうへてみるよ志よ
さまへつるを出来本のそん志つはそくこいとい志
て候あさてよ候い身をあさむうるを此は々
お法は中とあけてかそへうとそ見とんて
一ぞんの田あいてかさんのてふきて所あるか

とて御はらくかなしけにて二さんのおし
へうさんと志めし給へ

師 是かの御ことをこそやさきてまつらう志
そんそん志やうの名を申たてまつりによの
清水寺ての御縁にまうせてまつりまかて
おつとも女し我か清水にあらさる御縁にて
たとへ御りうすもしともちりうれん

弟 三さんのおかいつりさんのはれそや

師 さらつとりうによの御らうへんと申てまつると
よるとてういつまる書き御そうあひとそく
然てそとういかなけくさるれ名をとそく
ようなういはへさうてのすと我かなとそくれ

弟 ふとそうしもゆうせよこへうことの清た
さて是之

弟 さ七のさかりめんとすんはをたそうあるよ
様にてそしてけやすそうるや

師 その二千余はなけもやうとひてそくして
けふすみやとうへ大めんく我かこかの心さる
けうけとしてけやすきあつとくへ旅へ紙
そてわまれたるてんをうけよみてちうそさ
さめよてのたひつりさんにあつとてくころの
のそうにまうせう御う披之細かなしうけとして
けのさるの御へめんと之そ誰いうこも志せらにの
そんてうけさうすけひかうくけされそ。

なまけん時は神にありてを

第 はさのけうめんとゆ夜に候ハしすけるや

いつや

所 そうちをもとうへいゆきさへおろてはこ

のさうめんとゆ一夜にるを和上様ろをその

和ゆ夜に様まやしすけるに牛のとへにそん

しやとゆんちしまむらうをとらくのさう

めんとゆ義おう為その第一將あするま事されを

為に様まなうすれるに

十三

充てそちうまわしにものゆうめんとし

為に様まやしけ様にもへきや

作りてあきぬちうきましよるとうけさうつき

〇第君のるまるのつきとさとのはさうめん

をとえあうるあ様にすをこしとけうをお

与元あさの白一人死るまをのていおうくるら

て様るすしけるにその和るとてま海らん

さんのさうめんと様ましつくへとこそうひ

よてくひをとねて此様へまんむりにの

そまん時様るすしけつ共

〇第十二 はしめきまりしたんに

あさう將あの条て

第 はしめにて為とこちつとうみにゆうる事する

御中くのらせつをこぶちやの而傳。てくるるらぶので
ぶたうてとつかるぶちおいまをのひゆつうて
とすひつとはさんとのさう神とを。へおつん傳
うんそつこんひさんのあつしよ。おつうくとる
時のつんさん三おのつす

○蘇悉の印

蘇悉の印は十方三世の仏菩薩のゆへを
はのせいをひつろうておさうろ
多身よおさうろ七のす
一まんらんる者は志らくとらゆす
二まんたるしまる あとのまさゆす
三まんまくるをかくしるおる者はいゆいとる

さす
たわひやうけにいえさとかきゆす
おはんあんぎやの者よやとしとかます
共にるつうきんの身をうくるす
せるおらいとおさむけするえ
といつとはよおさうろ七のす
一てんへよらさいけんとくらゆうす
二たるおうてる者はたゝをおゆす
三そへ悉をる者をおさむるす
四まんせるかんすへき者をせろうんとそうす
五はんちおらくを楽思ゆさす
六はうれつしのおそくと叔す

ちんせ氏のへとく我にかくとを年来者の為ゝ
てうをとち孫ミ待うする也之
○かふであるのいふつうてをいひあるを
一ちゃうでんしや○二ちゃうゆすちしけ
○三ちゃうろくまでさ○四ちゃうでんへんを
也之

○てうかゝるのいる恃うてをこあるを
一ちゃいそてを○二ちゃうをてんさ○三ちゃ
始てとけて也之
二をいて流ちんとのさう孫をせを
一ちいさいあり○二ちゃうらんせんへみんを
○くんちんちちより○四ちゃうかるふてまでさ○

なみちちんしあの六ちゃうあくけて○七
ゆせうちその御あり也之
○あけてんたらんさいハあるを
一ちとハ流のいんしやいまの国をねる
をそへあとゝ○二ちゃうてきちる老は論を
進退をへえまるてへけとゝ○三ちゃいあ者
いなうこそせらるへきまるてへあとゝ○四ちゃ
そうちゆとちいしやのきくあげ人ハそう
陶人させすろへきまるてへけとゝ○五ちゃ慕
出ちゃ人の清慕者をうくへときまるてへあ
とゝ○六ちゃう兵さよまきへ清食そてうせ
凡をたまちるへとまるてへあとゝ○七ちゃう年

とくべてうきのほうてよそろくくちかう
へおとあす○八くん志田とちいさよ對し
てあんらうたまのくく天の法国を通
退らんへとよそへおとゝ
○おやまさの本らしよ
万すけひすうてうをと御ふさまをいたし
いるせんのさんとやまとやさんとけるかある
かんしよ法全志ゆあんてうちしくもさ
あやとところのさんへところほんてそろ
法のへおとへ法力をてまよ拝をあるれ
まうろゝてさるゆゑとみてあふくの拝
とたらかうす我らあやまさ　我らあや

かうさうやまさ　志よるて都を
とも□ほんの法んうまゐあさん
のうあうかんしよさん志ゆあんてうち
しくもさうあるところのさんへところさん
そうろ法のへおとへ法力をてまよ拝あるゝ
我本の法をてうをと都ゝ白へあん
●志くせんのおくしよ
てうをまてもいつよきいへにさんと
ためへあさう多法師のてうを我あとは
おんしそのとてへんさん志曽へあり拝まを
都を本るあまん　四らてまあうをてゐ一度
○志よくこのおうしよ

てうそのくらゐにやまとしは花咲て
くはんにすゝみさう心にそのけしく
よつの梅の影をなすあかん　ふてらう
よきうつ夏　代々とうさ福ゑんちやうさう
とむさかへ万すけひまてこそ我家
ますますよろこひ百の清みんたやうの清流
とみさかへあかん
足